

検出した主な遺構には柵や建物・溝・井戸・池・土壙・埋甕遺構などがある。

墨書き札類はSK1111111 土壙と、SD11071 溝下層で検出したSD11440溝から断片各一点が出土している。土壙は、東端部に残存していた島状の高まりの北部で検出した土壙で、東西二尺×南北二・五mを測る。出土した遺物は少ないが、大体室町時代中頃と考えられる。一方、溝は南北約一〇m×東西約一・二mを測り、鎌倉時代と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「□ノ□」

25×(24)×2 197

(2) やし

(152)×(12)×9 197

9 関係文献

小田原昭嗣 「草戸千軒町遺跡第30次調査略報」

(調査研究ニース『草戸千軒』No.106) 一九八一年
(志田原重人)

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編

『草戸千軒町遺跡研究資料一 草戸千軒—木簡—』

(A4版 本文六〇頁 図版六〇葉) 領価四千円(送料込)

△申込先△福山市花園町一ノ五ノ二 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所内 広島考古学研究会(振替口座 広島九一六九三)

『草戸千軒—木簡—』の刊行

広島県福山市の芦田川の中洲に所在する中世集落・草戸千軒町遺跡からは、一九六九年の第五次調査以来これまで約四千点の木簡が出土している。これらの木簡は同遺跡の解明はもとより、中世の商業史や信仰・習俗を明らかにする具体的な資料である上に、なによりも古代木簡に対する中世木簡の特質を考えるまとまつた資料として貴重である。この木簡の正式報告書が本年三月広島県草戸千軒町遺跡調査研究所から刊行された。報告書は第五次調査から一九七八年第二十六次調査までに出土した三千八百点余のうち断片・削屑を除く1633点を収載する。総説では遺跡の概要、木簡の出土遺構などとともに、第二回木簡学会で報告された中世木簡の形態と記載内容の特質について論じている。